
夏の祭ばやし

岡谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の祭ばやし

【Nコード】

N4906G

【作者名】

岡谷

【あらすじ】

ひとりぼっちだったボクにおばあさんは優しく話しかけてくれた。おばあさんは昔の遊びをたくさん教えてくれて、ボクにとってはそのどれもが新鮮だった。そんなある日、おばあさんに「一緒に夏祭りに行こう」と誘われる。

ブランコ

「僕は何年生？」

公園のブランコに一人で座っていたボクにそのおばあさんはそう
言って話しかけてきた。

「……五年生」

ボクは小さくそう答えた。

「名前は何て言うんだい？」

「……ヒロキ」

「そうかい……まだお家には帰らないのかい？」

おばあさんはブランコのすぐ下に置いてある黒いランドセルを見
てそう言った。

「……家に帰っても誰もいないから」

ボクがそう言つとおばあさんは悲しそうな顔をした。

ボクにはお母さんがいない。ボクがもっと小さい時に死んでしま
つたらしい。だから今はお父さんと二人で暮らしている。

お父さんは毎日仕事でいつも帰りは夜の八時を過ぎる。夕飯はいつもお父さんが前の日に買ってくるお弁当を温めて食べる。

学校にはたまに話をする子が何人かいるだけで友達と呼べるような子は一人もない。

一人で家にいるのが嫌なので学校が終わるといつもこの公園で時間を潰している。

「また明日もここに来るのかい？」

おばあさんは優しい声でそう聞いた。

「・・・うん」

ボクはまた小さい声で答えた。

遠くでツクツクボウシが鳴いていた。

次の日、いつものように公園へ行った。

ボクが昨日と同じようにブランコに座っていると昨日のおばあさんがまたやってきた。

両手に何かを持っていた。

「こんにちは」

おばあさんは笑顔でそう言つと皺くちな両手をかざし、手の中にあるものをボクに見せた。

「これ、何か知っているかい？」

手の中には不格好な形をした小さい丸い布の塊が三個あった。三個とも様々な色をしていた。

「……………」

「一個もってみな」

そう言つておばあさんは両手をさらにボクの方へと近づけた。ボクは赤と黄色の布が混ざつた塊を一個手の中から取つた。塊は思ったよりもずつと柔らかかった。ボクが使っている枕の感触に似ている。

「それ、お手玉つて言つんだよ」

「おてだま？」

「そうさ。おばあちゃん達が子供の頃によくそれで遊んだんだ。ちよつと貸してごらん」

そう言つとおばあさんはボクが持っていたお手玉を一個また自分の手の中に戻した。

そして、

「あんたがたどこさ ひどこさ ひどこさ くまもとさ くまもと
どこさ・・・」

そう歌いながら三個のお手玉を上手に手でグルグルと投げまわし
始めた。

「ああ、すごいー！すごい、すごい」

ボクは食い入るように目の前で行われている大道芸を見ていた。

「すごいかい？ヒロ君もやっつてごらん」

おばあさんはそう言って手に持っていたお手玉を三個ボクに渡し
た。ボクはその三個を今おばあさんがやっていたように宙へと投げ
た。

「うわっ」

玉は三個ともバラバラに飛んでいった。

「あっはっはっ、最初は誰だってそうなるんだ。もう一回やっつてご
らん」

ボクは三個のお手玉を拾うと再び宙へと投げた。

「・・・ああ、ダメだ」

またしても失敗した。

「おばあちゃんみたいに上手になるにはもっと練習が必要だね」

おばあさんは笑いながらそう言った。

その後もボクは何回も挑戦してみた。けれども一回も上手にはいかなかった。

「そんなに落ち込むんじゃない。もっと練習すればきっと上手になるさ。」

おばあさんはボクの頭を軽くポンポンと叩きながら言った。

「じゃあ今日はもう暗くなってきたから帰ろうか？」

ボクは黙って頷いた。

「……これ」

ボクはお手玉をおばあさんに返そうとした。

「それはヒロ君にあげるよ。上手になりたいのならたくさん練習するんだよ。それじゃまた明日ね」

そう言っておばあさんは公園を出て行った。

一人になったボクはおばあさんにあることを言っていないの思出しすぐにおばあさんの後を追って公園を出た。

「おばあさん！……」

公園の前の道路には誰の姿もなかった。

「・・・おばあさん、・・・ありがとう」

ボクは誰もいない道路に向かって小さくそう言った。

夏祭り

次の日もおばあさんは公園にやってきました。

「どうだい。お家でも練習したのかい？」

「うん。でもやっぱりダメだった」

「どれ、ちよつとやっつけてごらん」

ボクはまたお手玉を宙へ投げた。

「・・・・・・・・あつ」

「ああ、おいしい。でもあとちよつとじゃないか。たくさん練習したんだね」

「・・・・・・・・うん」

あまり人に褒められたことのないボクはおばあさんのその言葉がとてもうれしかった。

それからボクとおばあさんは毎日この公園で遊ぶようになった。おばあさんはお手玉のほかにあやとりやケン玉、おはじきといった昔の遊びをたくさん教えてくれた。

おばあさんが持ってくるそれらの遊びはボクにとってどれも新鮮だった。

不思議なことにおばあさんは、ボクがいつ公園に来るのがわかってるかのように、いつもボクが公園に着くとすぐに姿を現した。たまにボクが学校の行事で帰りが遅くなったときでもかならずボクのすぐ後に来る。

おばあさんとの毎日はとても楽しかった。おばあさんはいつでもボクのことを優しくしてくれ、お母さんの存在を知らないボクにとっておばあさんはたった一人の友達と同時にお母さんのような存在でもあった。

そんなある日、おばあさんに今度一緒に夏祭りに行かないか？と誘われた。その頃には、もうボクは上手にお手玉を投げられるようになっていた。

「夏祭り？」

「そう、夏祭りだよ。今度の土曜日にあるだろ？」

ボクが住んでいるこの地域では毎年この時期になると夏祭りが開催される。

「おばあちゃんね、お祭りが大好きなんだ。毎年行っているんだよ」

「ボク、行ったことない」

「じゃあ、なおさらだ。お祭りは楽しいよ」

ボクだってお祭りに行ってみたけど一緒に行ってくれる人

がいなかったのだ。

「おばあちゃんと一緒に行ってくれるかい？」

「うん、約束だよ」

「もちろんさ、はい」

おばあさんは小指を出した。ボクも同じように小指を出し、おばあさんの小指に引っかけた。

「ゆびきりげんまん うそついたらはりせんぼんのくます ゆびきり
つた」

そう言ってボクとおばあさんは二人で笑った。

嫉妬

最近、うちのばあちゃんの様子がおかしい。夕方になると部屋の窓からずっと外を眺めているのだ。オレが「ばあちゃん」と呼んでもずっと外を眺めている。

どうやらうちの家のすぐ隣にある公園を見ているらしい。しかも視線はいつもその公園の端っこにあるブランコにいつている。まるで誰かを見ているように……。しかしいつ見てもその公園には誰の姿もなかった。

ある日いつものように公園を眺めていたばあちゃんが突然家を出てその公園に出かけて行った。

やはりばあちゃんはブランコのほうへ歩いて行った。

オレはブランコに何かあるのかと気になって見ていたが、ばあちゃんは何をするでもなくずっとブランコを見続けていた。よく見ると何か一人で呟いているように見えた。

しばらくして帰って来たばあちゃんはタンスの中から裁縫箱を引っ張り出して何かを作り始めた。どうやらお手玉を作っているようだ。そう言えば昔よくばあちゃんとお手玉をやったな。

次の日、ばあちゃんは昨日と同じように公園に出かけていった。手には昨日作っていたお手玉が握られていた。

やはりばあちゃんはブランコのほうに行く昨日と同じように一人で何かを呟き始めた。そしてそのあとずっと一人でお手玉をして遊んでいた。

その日から毎日ばあちゃんは公園に一人で出かけていった。ばあちゃんはいつも誰かと遊んでいるかのように楽しそうにしていた。

ばあちゃんはお手玉以外にも色々な昔の玩具を公園に持っていった。そのどれもが昔ばあちゃんと一緒に遊んだものだった。オレはそんなばあちゃんが心配でたまらなかつた。ばあちゃんは一体どうしてしまったのだろうか？

そろそろ夏祭りの時期だ。オレとばあちゃんは毎年一緒に夏祭りに行っている。

「ばあちゃん、もうすぐお祭りだね」

オレはこの前そうばあちゃんに言った。しかしばあちゃんは「今年と一緒にに行けないんだ」と冷たくそう言った。

何でなんだ？何で今年と一緒に行ってくれないんだ！毎年一緒に行っているじゃないか！オレはばあちゃんと一緒に行く夏祭りが大好きなんだ。

ばあちゃんは相変わらず一人で公園で遊んでいる。毎日楽しそうに遊んでいる。もしかして祭りも一人で行くのかい？いや、そんな

ことはさせないよ。

ばあちゃん、今年も絶対にはあちゃんと一緒に行くよ。絶対に。

祭ばやし

それからの数日間、ボクは毎日お祭りのことを考えていた。

おばあさんは何でも好きなものを買ってくれと言っていたが、お祭りには何かがあるのかな？おいしいものや楽しいものがたくさんあるのかな？そうだ、おばあさんと一緒に花火もやりたいな。

ボクの妄想はどんどんと大きくなっていった。

そしてとうとうお祭りの前日、ボクの胸は期待と緊張で張り裂けそうになっていた。

「ヒロ君、いよいよ明日だね。楽しみかい？」

「うん、すごい楽しみ。おばあさんは？」

「おばあちゃんも楽しみだよ」

「ねえ、おばあさん」

「なんだい？ヒロ君」

「去年のお祭りは誰と行ったの？」

ボクはおばあさんにずっと気になっていたことを聞いた。

「去年はおばあちゃんの孫と行ったんだよ。去年だけじゃなく毎年お祭りには孫と一緒に行っていったんだ」

「何で今年と一緒に行かないの？」

ボクは聞いた。

「もう孫はいないんだ」

おばあさんはとても悲しそうな顔をして言った。

「去年の冬に交通事故で死んでしまっただね」

ボクも悲しい気持ちになった。

「あの子もお祭りが大好きでね。死んでしまっただからもときどき夢の中に現れて“ばあちゃん、もうすぐお祭りだね”って笑顔で言うんだよ。その度に“今年と一緒に行けないんだ”って言うんだけど、あの子わかってくれなくてね」

おばあさんはさらに話を続けた。

「あの子も可哀そうな子でね。幼いときに両親を亡くしているんだ。その後おばあちゃんが引き取って去年までずっと二人で暮らしていたんだけどね。それに今年中学を卒業する予定だったんだ。でもいくら悲しんでもあの子はもう帰ってこないんだよね」

「おばあさん。ボクがおばあさんの孫になるよ」

ボクはおばあさんの目を見て言った。

「ヒロ君が？ヒロ君がおばあちゃんの孫になってくれるのかい？」

「うん。だからもう悲しがないで」

「ありがとね。ヒロ君は本当に優しい子だね」

おばあさんの瞳から涙がこぼれた。

その後もボクとおばあさんは明日のことについてたくさんおしゃべりをした。そして気が付くともう帰る時間になっていた。

「それじゃまた明日」

そう言っ てボクらは明日の約束をし、別れた。

その日の夜、明日のことで頭がいっぱいになってなかなか寝つくことの出来なかったボクは不思議な夢を見た。

最初、その夢の中でボクは真つ暗闇の中に一人でいた。しかし、しばらくするとボクの前におばあさんが現れた。おばあさんはボクに微笑みながらゆつくりと手を振っていた。しばらくその状況が続くと今度は突然おばあさんの横にボクの知らない男の人が現れた。その男の人はおばあさんの手を握るとボクに背を向けてそのままおばあさんを連れてボクから離れていった。二人の姿はどんどん小さくなり、そしてとうとう消えてしまった。

遠くのほうから祭ばやし之音だけが聞こえた。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4906g/>

夏の祭ばやし

2010年11月2日12時27分発行